

続新能奮戦記



天佑神助という言葉をしみじみと噛みしめて一ヶ月が経った。

私のひたむきな気持ちがあ天に通じ、多くの方々の善意を頂くことが出来たのだと思う。そして皆様のその善意こそが「第三回入来新能」を成功に導いてくれたのだ。このひたひたと湧き出る感謝の気持ちをどう表現したら皆様にお伝えすることが出来るのだろうか。新能にとっての一番の敵は雨である。この人間の力では絶対にコントロールすることは不可能な自然の営み。あの日あの時間、何処かでは大雨だったかもしれない。一時間おきくらいに177番を回して予報を聞くと「薩摩地方一時雨」と言っていた。ただ祈る他はなかった。

そしてまさに奇蹟が起こった。五時の開場と

ともに、重く掛かっていた雲が徐々に薄れて、白々とした上弦の月が朧げに舞台の上方に現れた。私は気付かなかったが、前回と同様にねぐらに帰る白鷺やカラスがが頭上を舞ったのだという。

七百余人の観客は、会場係の指示に従って順序よく入場して下さって、豊席、椅子席も殆ど満席であった。チケットの売り上げ枚数から八百人未満として用意したそうだが、それも正解だった。実行委員が豊の借賃の節約をしてくれたのである。

前夜照明のテストに立ち会った時は、暗いので気がつかなかったのか、当日大車輪でやったのか、体育館全体をすっぽり黒い寒冷紗で覆ってしまったのであるには私も驚いた。隅のカラーの鉄棒のブリッジなども手際よく隠されていた。会場の設営や入場者の整理、売店などの実際の作業は、入来町の若者たちのボランティアによって行われる。彼らはパラグラー大会や夏祭野外映画祭など町で行うイベントを手掛けてい

るので、実に手際よくことを運んでくれる。特に駐車場の整理などは手慣れていて、終了後も二十分もすれば一台もいなくなるという。今年もは前回の不備だったところを自主的に補正していた。準備の肉体労働もさりながら、片付けの労働も大変なものだと思つ。こうした陰の協力者の努力があればこそ立派なイベントが成り立つのだ。そしてこうした気風のある入来町を誇りとしたい。

当日は「入来町にはどうやって行けばよいのか」という電話が多かった。初めて入来を訪れた方が多かったことの証である。新能が入来を紹介するよい機会になっていることは私も嬉しいが、町の若者たちも満足していることだろう。

終了後、何人もの方から電話 F A X、手紙や葉書を頂いた。どれも日本の伝統芸能に感激なさったと喜びを伝えて下さった。次の公演のための参考にと気になった点を指摘下さった方もいる。有り難いことだ。

また新聞に投書して下さった方にもお礼を申

し上げたいと思つ。見に来れなかった方々にその内容を知って頂くには何よりである。榎田満州雄氏はいみじくも私の志を書いて下さった。「単なる町おこしではない。世界に誇る日本の伝統文化を薩摩の一角がになっているのだ。ホンモノを見ることができるといふ喜びをみんなで共有したいものである」

そうだ。分かって下さる方々が大勢いる。ここまで持つて来るまでに、どんなに大勢の方々のご協力があったことが。

県庁の文化振興課経由で、須賀龍郎知事の祝辞を戴けたことは有り難いことであつた。

出来れば知事にも、現実を忘れて一時を幽玄の世界に過ごしてほしかった。

実行面で言えば、チケット販売をお願いしている山形屋さん、タカプラさん。お弁当券やバス券は手数料なしで売って下さった。

個人的に一肌脱いで沢山の人々を連れて来て下さった、「華」の川涯利夫先生、「随筆がこしま社」の上園登志子さん、野田の感心寺の芝

一三和尚さん、串長町の中野理恵子さん、城山観光保会長の好子夫人、全労済鹿児島県本部の石橋幸輝さん、川内高校の榎田満州雄先生、高山町の清水周作さん、鹿児島大学の土田克義先生、三田会の萩原しのぶさん、串木野の中島タツ子さんなど十指に余る協力者の皆様に心から感謝申し上げます。勿論、お友達を誘い合わせて三人、四人といらっしゃった方々にもこの場で感謝の気持ちを是非お伝えしたいと思います。

また絶対的に足りない経費を補おうと、百万円を目標にプログラムに広告を集めたが、快く応諾して下さった大小五十社余りの会社や商店の方々にも深くお礼を申し上げます。お陰様で広告料の目標は達成出来たが、赤字は解消出来なかつた。来年も頑張るつもりなので、マスの小さかつた所は是非二倍の大きさにして下さると嬉しいなど、今から勝手に希望している。勿論新規に参加して下さるお店や会社も二倍にしたいものである。

そしてこの情報の時代、マスコミは絶大な力

である。無力な私たちに、新聞紙上に取り上げてくださったたり、短時間といえどもテレビ各社やラジオがそれぞれのメディアを通してお知らせ下さったことは大きなことだと思つ。これもお礼申し上げねばならない。

鹿児島市内の広告塔に掲示出来ることを教えて下さった市の職員の方など、表面に見えないところで応援くださっていることも忘れてはならないと思つ。

地元の花水木会支援会の方々には、ポスターの配達や掲示板貼りなど協力して頂いた。朝五時入来スタートの鹿児島市内の広告塔のポスター貼りを三回もやったのだ。鹿児島大学の土田教授セミの方々にも手伝つて頂いたが、こちらはまだお礼が済んでいない。

と、あれこれ数え上げたらキリもないほどのご好意の積み上げが、当日は鹿児島市の大花火大会があつたにも係わらず成功させて頂いたのだと思つ。

私個人の苦勞と言えば、専ら経費を生み出す

作業の明け暮れである。最低の予算六百万円を如何に捻出するか。当初の五千円の入場料券を千枚売って、不足は百万円の広告料でという目標の達成である。

殆どが振込払いの販売である。電話での申し込みに住所を聞いて振込用紙を送る。申し込み枚数と代金をチェックして、チケットの番号と送り先を控えて先方に返送する、といった細々した作業の毎日である。しかし小さな通信欄に書かれている激励のメッセージがどんなに私を力付けてくれたことが。

広告集めも私一人の肩にかかっている。もう厚かましいオバチャンを絵に描いた風情であちこち依頼して集めて歩いた。こんな素人の不躡な申し込みを聞き届けて下さった企業の方々は感謝という他はない。本来は広告料を徴収する側の鹿児島テレビ局四社が、同じページに広告を載せて下さったのは前代未聞かもしれない。

収支の結果は、細々と節約したお蔭で、支出

が五百八十八万四千円であった。収入は、精一杯の努力でも、不景気のせいもあるのだろうかととも千枚は無理であった。それでも当日券も入れて七百四十枚の売り上げがあったのだった。広告料を合わせても収入四百六十八万円、差し引き百二十万円の赤字であった。前回、前々回と全て赤字で、これは何とかしなければ継続出来ない。是非大きなスポンサーが現れてほしいものである。

黙ってゴルフの会費権を手放してくれた夫、来院重朝に、私も口には表さないが心の中で最大の感謝を捧げている。

